



## 「ハムレット」序論 I

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 平松, 秀雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00001887">https://doi.org/10.32150/00001887</a>

## 「ハムレット」序論 I

平 松 秀 雄

北海道教育大学札幌分校英文学研究室

Hideo HIRAMATSU : An Introduction to *Hamlet*

多分、*Hamlet* ほど、過去数百年の長期にわたり、世界中の批評家達の論議の対象にされたものではなく、また、この作品の主人公ほど、多くの俳優達に自ら演じてみようという意欲をかきたてたものはないであろう。しかも、それだけ長い間、多くの人に論じられ、かつ、好んで演じられているにもかかわらず、これ程、作品そのものに対する評価や、主人公の性格の解釈に、まちまちの判断が下されてきたものはない。もしもわれわれが、それら一人一人の批評家の、もっともらしい説明だけを聞いていると、この作品は、あたかも一つの万華鏡のように思えてきたり、あるいはまた、われわれ自身が *Hamlet* に、

Do you see yonder cloud that's almost in shape of a camel? (III, ii, 393)

と問われているかのように、ある種の戸惑いを感じないわけにはいかない。まことに、われわれは、過去において下された、これら批評の多様性を見るだけで、この作品がいかに文学上の *Mona Lisa* として、20世紀の今日に至るまで、解き難い不思議な力を秘めていたかを思い知らされる。そして、しばしば、それが単なる悲劇というよりは、むしろ、問題劇と呼ばれる方がよりふさわしいと言われても、さして不思議ではないように思われて来る。今日このような作品を、過去の批評家達の影響によって生まれる多少の偏見、ないしは、独断なしに読むことは誰しも困難なことであろう。そしてまた、そのようにして書かれた作品論が、どのようなものであれ、多少の抵抗なしに読まれることはあるまいということも充分に覚悟しないわけにはいかないのである。

## — 背 景 —

*Hamlet* が書かれたのは、1599年末から1600年初め頃までの間であつたらうと言われている。<sup>1)</sup> それまで10年間、主として喜劇、歴史劇を書いていた Shakespeare が、丁度この頃から7、8年の間に次々と、*Julius Caesar*, *Hamlet*, *Othello*, *King Lear*, *Macbeth*, *Antony and Cleopatra*, *Coriolanus*, *Timon of Athens* 等の悲劇を書いているところを見ると、このような、いわゆる悲劇時代の初めに書かれたこの作品が、作者の精神の芸術的展開の過程の中で持つ意味は重大であると言わなければならない。

何故、作者はこの頃から、それまでに見られた美しい人間の心の秩序の崩壊して行く有様を描き、人間の魂の暗い深淵をのぞくようになって行ったのであろうか。何故、ことさらに、外観と実体との亀裂を求め、そこから平穏なるべき人間社会の病弊を掘り起し、調和よりは争いを、寛容よりは怒り

を、光よりは闇を、愛よりは憎しみを、希望よりは絶望を、優しく恵み深い善よりは醜悪な罪と悪それ自体を、明るい生の肯定よりは、むしろ、その破滅を凝視するようになっていったのであろうか。

史家の指摘するところによれば、作者のいわゆる暗黒時代に入る契機になった事件は二つあるという。一つは彼の個人的な愛情問題の失敗であり、もう一つは Essex 伯の謀反、失脚の事件である。<sup>2)</sup> 前者については、つまびらかでないが、後者については次のように言われている。すなわち、1601年2月25日、それまで10年間にわたり Elizabeth 女王の寵愛を一身に受けていた彼の恩人 Essex 伯が、ロンドン塔の中で刎首されるという事件があり、彼はそれに深刻な衝撃を受け、劇作家として、この Essex 伯の性格の秘密を *Hamlet* の中で解明しようとした。このことは、われわれが、この不運な Essex 伯の性格を調べれば調べる程、それが作品の中の Hamlet の性格と似ているところから推察出来るという。<sup>3)</sup> これらの事件の他に、われわれはまた次のような事情も要因の一つとしてつけ加えるべきであろう。それは Elizabeth 朝晩年の社会の中に一般にたゞよいはじめていた、ある‘憂うつな雰囲気’である。1598年に出た *The Serving-man's Comfort* というパンフレットの中に出ている小唄の一節は、当時の庶民の感情の一端を示している。

The Golden world is past and gone,  
The Iron age hath runne his race,  
The lump of Lead is left alone  
To press the poore in every place.<sup>4)</sup>

実際、当時、London の街には、既成の社会の秩序に反逆的で、混沌たる社会を憎悪し、腕を組んで物憂げに歩くイタリア帰りの‘不平家’達がいたらしい。彼等は学問も趣味もあり、また、機知にも富んでいたが、バンドのない帽子をかぶり、長靴下にガーターをつけず、黒か茶色のマントと上衣を着て、片手に短剣をもてあそび、気むずかしい、沈滞した、つまらなそうな面持ちで、人とのつき合いを避け、深い孤独を求めて歩いていたという。<sup>5)</sup> 作者は、このような‘憂うつ家’に特別の興味を持ったのかもしれない。あるいはまた、作者が、当時出ていた Timothy Bright の *A Treatise of Melancholie* を読んで、このようなタイプの人間を、作品という鏡に映してみようとしたのかもしれない。<sup>6)</sup> あるいはまた、作者自身が、かつて人間を謳歌した、放恣な Renaissance の‘陽気なイギリス’が、ようやくその爛熟期を迎える頃、その反動として、社会の中にきざしはじめた病的症状、すなわち‘平和と繁栄の吹き出物’<sup>7)</sup> とも言える、頹廢的、反道徳的精神の風潮を見て、疑惑と嫌悪の感情を抱くようになったのかもしれない。いずれにせよ、さすがに外向的で活気に満ち溢れた Elizabeth 朝も、その末期を迎える頃になると、彼の心の中に言い知れぬ不安が暗い影を落としはじめ、彼の劇作の興味の中心が、単なる人物間の外面的な衝突よりは、むしろ、主人公の魂の内部における深刻な動乱、葛藤の描写へ移って行ったものようである。

ここでは、しかしながら、作品の背景にある事件そのものを探索し、彼の創作の外的動機を探ろうとは思わない。むしろ問題にしたいのは、作者に与えられた現実が何であれ、それを、彼が劇作という精神的構築作業の素材の一部として、どのように主体的に自分の心眼の中に捕え、どのように芸術的眞実として主張しようとしていたのかということ、すなわち、作者の芸術的意図はどこにあったかということである。

## 二

### — 原 作 —

Shakespeare が *Hamlet* を書くにあたって、直接または間接に利用し、また、影響を受けたで

あろうと思われる先人の作品については、多少の異説もあるが、今日のところ、大体次のようなものが考えられている。

(1) 1200年頃、Saxo Grammaticus によって書かれた *Historia Danica* (第三巻)。

(2) 1572年、Belleforest によって前記のものが訳され、かつ、多少敷衍されてとり入れられている *Histories Tragiques* (第5巻)。これはその数年後に英訳されている。

(3) 上記の(2)をもとにして Thomas Kyd が書いたと推定される作品、いわゆる *Ur Hamlet* とよばれているもの。これは現存していないが、当時イギリスの大陸まわりの旅役者の台本からドイツの劇団の手で翻訳され、その後1781年 Berlin ではじめて印刷された *Der Bestrafte Brudermord* から、ほぼその内容が推定されている。

(4) 1592年、Thomas Kyd によって書かれた *Spanish Tragedy*。

このうち(1)と(2)については、いずれが Shakespeare に読まれたか定説はないが、内容はほぼ似たものである。

作者はこれら原本に出て来る人物や筋を、あるいはそのまま使い、あるいは改めて、彼独自の作品の世界を創ろうとしたのであった、それが、かりに、いわゆる成層体であって、劇的統一性を欠いたものになってしまったと言えるか否かは別としても、少なくとも、彼は彼自らの芸術的意図を盛り込んで原本を改訂したにちがいない。従って、われわれは、これら原本と彼の作品とを比較し、その相違点の中に、作者の意図を汲み取ることが出来るのではないかと考えられる。

Shakespeare の作品の中で、上の原本のいずれとも異なり、彼自身の主張がこめられていると見られるところ、あるいは、それぞれ互いに異なっている上記のものうち、Shakespeare 自身が選択したであろうと思われるところは何処にあるのだろうか。それを要約すると、おおよそ次の諸点にあると言えよう。

(1) Claudius には特別護衛の者がついていて、Hamlet の襲撃を警戒しているわけではない。彼は、Hamlet がその気にさえなれば、何時でも殺され得る状態になっている。Belleforest や Saxo では、Claudius の殺人は衆知の事実であり、Claudius は Hamlet の復讐をはじめから恐れていた。*Der Bestrafte Brudermord* では、Hamlet が、しばしば王のまわりに護衛が囲んでいて、復讐が出来ないという意味のことを言っている。Kyd も同じく、Claudius を近づき難いものにしてている。彼は、Ghost を出現させることによって、殺人が秘密裡に行なわれたものにしたが、Shakespeare はそれを受け継いだのである。このようにして、復讐の障害は内的なものになり、にせ気狂いは、かえって、Claudius に疑いを持たせるものになった。Kyd は、先王の殺害を亡霊によって秘密に告知されることにし、それで、にせ気狂いは不合理なものになってしまったが、Shakespeare は、にせ気狂い自身に興味を持ったのである。<sup>8)</sup>

(2) 亡霊に特別重要な劇的機能を持たせている。亡霊は Belleforest にはなく、Kyd がはじめて用いた趣向であったが、*Spanish Tragedy* では、それは筋の進行を横から見ているにすぎない。Shakespeare の作品では、亡霊が主人公の行動の強烈な動機づけをしている。

(3) Ophelia は宰相の娘であり、かつ、Hamlet の恋人として登場している。Saxo では、彼女は Polonius とは関係がなく、Hamlet を誘惑するおとりに使われているにすぎない。また、*Der Bestrafte Brudermord* でも、彼女は Hamlet と恋愛関係があるわけではなく、狂乱の場以外に殆んど現われず、しかも、それも comic relief としてしか扱われていない。Belleforest では、彼女は courtesan である。

(4) Horatio, Laertes, Hamlet 等が、すべて大学の学生、すなわち、新しい時代の知識人として登場している。

(5) Grave-scene を作り、それに特別の意味を持たせている。

(6) 三組の父子、すなわち、Hamlet, Polonius, Fortinbras のそれらを並べ、それぞれの復讐を描いている。中心になるのは勿論 Hamlet の復讐である。原本のいずれにもこのような対比はない。

(7) Hamlet はさいごに目的を果たして死ぬ。Belleforest では幸福な結末になっている。すなわち、Hamlet は英国王の娘と結婚して、一年以上その地に滞在してから帰国し、宴会を開いてその会場に火を放ち、王の家来を皆殺しにした上、自ら王を殺す。それから国民に演説をし、皆に祝福されて王位につく。Der Bestrafte Brudermord では、Hamlet はさいごに死んでいる。Shakespeare は後者をとった。

以上の諸項目のうち、(1)は、作者が復讐の外的障害を取り除くことにより、興味の中心をもっぱら復讐者の内面の葛藤の描写に置こうとしていることを、また、(2)は、作者が主人公の復讐心の発生の秘密を見せる為に、亡霊をその劇的手段として使おうとしていることを示している。(3)、(4)、(5)はいずれも、主人公を、単に野蛮な時代の残忍な復讐者としてではなく、人生の意味を深く考え得る Renaissance の若い知識人として登場させようとしていることを、(6)は、主人公の復讐の特徴を示す為に、普通の行動性を持った復讐形態を並べていることを、(7)は、復讐者は死ななければならないという、復讐の悲劇的皮肉を見せようとしていることを示している。

つまり、作者は、この劇を作るにあたって、基本的には、死と罪の浄化と再生という型を持つ復讐劇の骨格を組みながら、しかも、原始的で殺伐な流血の悲劇として、復讐の行為そのものを描くことだけにはあきらまず、主人公に新しい文明の光と豊かな人間性を与えながら、なおかつ、そこに見られる人間共有の復讐心それ自体の発生、展開、結末の次第をも描こうとしたものと考えられる。

このことはまた、この劇の構成上の諸点から見ても明らかである。

(1) 作者はこの劇の主人公の独白を多く、かつ、長いものにして、観客が主人公の内側に入り、彼と共に周囲の人物を見るようにしている。これは Shakespeare の他の作品については言えないことである。

(2) この劇全体の中で、主人公の台詞の量の占める割合が非常に大きい。Hamlet の台詞の行数は約 1500行で、全体の行数約 4000行の四割近く、彼について行数の多い敵対者、Claudius の行数約 500行をはるかに上回る。Hamlet の他の人物に対して占める比重の大きさは、このことからだけでも示されよう。

(3) 作者は、この劇の場面の設定を大部分 Elsinore に集中している。舞台には Paris も海賊の場面も Norway も出ず、そこでの出来事は、間接的に報告という形で観客に知らされているにすぎない。これは Shakespeare の作品には珍しいことであって、作者の特殊な劇的意図があるからである。それは、Granville-Barker が指摘しているように、作者が主人公の不行動を強調しようとする目的を持っていて、その効果をねらったものであろう。しかし、同時にまたこのことは、観客をして、主人公と共に、Elsinore に忙しく出入りする彼のまわりの人々を見るように、観客の視点を Hamlet の内側に固定させるという効果をもねらっているものである。

(4) 作者は、時間の構成の上でも、それが主人公の心理状態を示すのに直接役立つように配慮している。すなわち、この劇全体を通じて、主人公の内面の動きに合わせて、時の経過を意識的に観客に知らせたり知らせなかつたりしている。主人公の復讐心が激しくかりたてられて、彼が緊迫感につつまれている時には、時間の経過がしばしば示され、それとは逆の気分の時には示されていない。<sup>9)</sup>

以上のようにして、この劇の構成上の特徴から見ても、作者は主人公の内面の動きに焦点を当て

ようとしているということが出来る。*Hamlet* 論の多くが、主人公の性格をめぐってなされることが多いという事実もまた当然のなりゆきであると言わなければならない。

## 三

## — 亡 霊 —

## (1)

*Hamlet* は、*Macbeth* と同じように、超自然物の出現の場面から始まっている。多くの批評家達によって指摘されている、この場での亡霊導入の技法の巧みさもさることながら、われわれは何よりも、こうした超自然物の登場それ自体が持つ、劇的な意味に注目すべきであろう。それは、単に冒頭において、観客に戦慄を与え、好奇の目を舞台に集中させる為だけのものでもなく、劇の開始以前の、Claudius の行為を提示し、観客をして、*Hamlet* と共に、彼を疑惑の目で見させる為だけのものでもない。Shakespeare の場合、亡霊の出現は、Kyd の場合よりも、はるかに密接に、この作品の主題そのものにかかわり合っているのである。

深夜の望楼にすばやく交わされる歩哨の言葉は、この劇を全体的に支配している疑惑の雰囲気をも暗示するかのような、“Who’s there?” “Nay, answer me: stand and unfold yourself”, それに続く、あたかも皮肉な悲劇の幕上げを告げるかと思われる、“Long live the King!”、及び、底知れない不安と孤独を示す、“Bernardo?” “He”などで始まっている。これらはすべて、Elsinor の城をつつむ無気味な霧の世界を暗示すると共に、あとから登場する主人公 *Hamlet* の、むなしく暗い、孤独な、心象風景を予示しているのであり、次に現われる無名の兵士の、“I am sick at heart” の一言も、*Hamlet* の、何かやり切れない、深い嫌悪感にさいなまれた心情を、象徴的に前触れしているのである。やがて亡霊が現われ、われわれが、歩哨と共に、それは一体何であるかと問う時、われわれは、すでに全く *Hamlet* の世界に入ってしまったのであり、そしてまた同時に、主人公 *Hamlet* の内面世界に引き入れられてしまっているのである。

そもそも、この作品における亡霊とは何であろうか。その劇的意味を問うことなしに、この作品の主題の解明を企てることは困難であろう。Shakespeare が *Hamlet* において利用しようとしていた亡霊とは、元来どのようなものであり、それに、彼はどのような劇的機能を持たせようとしたのであろうか。

もともと、亡霊の登場は Belleforest にはなかったものである。と言うのは、そこでは Claudius に相当する Fengon が、“自分は *Hamlet* の母を守る為彼の父を殺したのだ”と公言しているからである。Kyd はそのような公然たる殺人を、亡霊による秘密の告知という形に変えて、主人公の動機を複雑にしたのであった。けれども、それは、ただ、観客の好奇心をかき立てるにすぎない Seneca 的なものであって、その正体に関する問題は第一幕で終わってしまい、劇中劇は、亡霊の言葉をためす為のものではなく、Claudius の罪を公衆の面前にさらす為のものなのであった。Shakespeare は亡霊の正体に関する主人公の疑いを強調し、それを、彼の逡巡する心の展開と関連させたのである。

ところで、当時の民衆は、亡霊をどのように受け取っていたのであろうか。彼等にとって、それはただの幻覚ではなく、全く客観的に実在するものなのであった。一見安定しているように見えても、いつ動乱の世になるかわからないという、いわゆる、不安と動揺の時代の人々にとって、その出現は、彼等に鳥肌を立たせる思いをさせたであろうが、同時にまた、それは、抑え難い死後の生命への望みを、具体的な形態を整えて満たしてくれるものであり、また、彼等の神秘性と公正への

あくことない渴望を満たしてくれるものでもあった。<sup>10)</sup>けれども、そのような超自然物の持つ実際の意味については、皆目見当のつかない、疑わしいものなのであった。つまり、彼等は、そうした恐怖と期待と疑惑の目をもって、亡霊を迎えたのである。冒頭の歩哨達の言っていることは、まさに、そのような当時の民衆の考え方を代表して示している。

実際、当時の思想家達の間でも、亡霊の正体に関しては、かなり危急の問題として、盛んに論争のたねにされていたものらしい。けれども、勿論、Shakespeare は、亡霊を特定の神学者だけに問題を提供しようとして登場させたわけではなく、たまたま格好の劇的相関物として、一般観客に見せる為に使っただけである。

今日の批評家達の間でも、当時 Protestant と Catholic の間で、はたして、亡霊に関する意見の相違があったか否かに関しては、議論の余地を残しているものようである。たとえば、J. D. Wilson によると、亡霊についての見解は、Catholic と Protestant とそれぞれ次のように違っていたという。すなわち、“Catholic 的見地では、亡霊は煉獄から、現世の人と話をする為に、神によって許されて来た靈魂であり、Protestant 的見地では、煉獄を信じることはすでにやめており、天国で幸福にしている魂や、地獄にとじこめられている魂が、地上に帰ることが許されるとはとても信じられず、従って、彼等の多くは、亡霊は死者の靈魂ではあり得ないという結論に到達していた。亡霊は外見のようなものではなく、あるいは天使であるかもしれぬが、大抵の場合は、悪い目的の為に死者の形をした、悪魔であるにちがいないと思っていた。”<sup>11)</sup>ところが、E. Prosser は、“J. D. Wilson や L. B. Campbell はまちがっている。彼等が、Catholic では、煉獄にいる靈魂が、いかなる目的の為にでも地上に帰ることを許されており、そのいかなる命令への服従も宗教的義務であると考えられていたとするのは、本当の Catholic 的立場を示していない”という意味のことを言っている。<sup>12)</sup>彼によれば、死者の魂が地上を訪れる為には、奇跡が必要とされるが、Catholic は、“特殊な場合”にのみ、このような奇跡は認められると信じており、しかも、そのようなことは極めてまれであって、彼等は、大抵の場合、死者の魂であると自ら名乗るような靈魂は、実際、悪魔であると警告されていた。従って、Protestant と Catholic の見解は、一般に考えられているよりはもっと近いものであったと Prosser は言っている。

いずれにせよ、当時宗教上の立場を強く主張する人々の間で、亡霊の正体についての意見が、やかましくとり交わされていたに相違ないのであるが、まして、一般民衆にとっては、ますます亡霊は、まことに謎につつまれた奇怪なものであったに違いない。それらの議論の中で、当時の一般の人々に相当の影響を与えていたのは James I や Bible 中の言葉であろう。James I は、Scotland にいた時 Demonology について特別の関心を持ち、それに関する本を書いたことで知られているが、彼によれば、悪魔は、しばしば人間の姿をして、人を誘惑する為にのみ現われるものなのであった。そして彼は、

“Since the coming of Christ in the flesh, and establishing of his Church by the Apostles, all miracles, visions, prophecies, and appearances of Angels or good spirites are ceased.”<sup>13)</sup>

と言っている。また、衆知のように、Bible には、

“Believe not every spirit, but try the spirits whether they are of God.”<sup>14)</sup>

と書かれている。

亡霊の正体、特にその善悪に関して、さまざまな議論があったということは、当時の人々がそれに対して抱く不安と恐怖がいかに大きかったかを示している。全く得体の知れないものが、ある日突然人を訪れ、その人の運命を一変させ、時には彼を破滅の淵に連れて行くことさえあるかもしれ

ないという不安が人の心に残されている以上、人は、あらかじめその出現に備えて、その善霊か悪霊かの見分け方を知っていなければならない。Prosser は、亡霊に関する実際の試験のし方については、Protestant も Catholic も共通している点が多かったことを、多くの例証を示しながら、指摘している。彼によると、亡霊の善悪を判断する基準はいろいろあったが、それは例えば次のようなものであるという。亡霊が夜、特に真夜中に現われれば、それは悪魔的なものなのであった。“暗闇の王子”は夜こそ、その力を発揮するからである。そして彼は、

“When hath the divell commonly first appeared unto anie man but in the night?……

A generall principle it is, hee that doth ill hateth the light.”

という、Thomas Nashe の *Terrors of the Night* からの句を引用している。また、悪魔が好んで出現する場所は限られていて、墓場、犯罪の場、戦場、絞首台、古い家や城等が多く、特に犠牲者が孤独にいるところがねらわれる傾向がある。また彼等は、迷信を信じやすい単純な人や、無邪気な子供とか、殺人者、狂人、魔法使い、特に、憂うつ症にかかっている人に訪れやすいものであって、Bright の *A Treatise of Melancholie* の句を引用するならば、一般に“憂うつは悪魔の手に入った武器のようなもの”である。要するに、Protestant も Catholic も判断の基準はほぼ同じであって、もしも亡霊が現われたならば、先ずそれがいつ、どこに、誰の前に現われたかをみなければならぬ。そして、もしもそれが、神の名において話せと人にせまられて、消えて行くようなものであったり、少しでも地獄の火炎を暗示したり、悪徳に刺戟されていたり、怒りやうらみに心を動かされていたり、他人の犯罪を非難したりするものであるならば、人はそれを警戒しなければならない。善霊ならば、先にあげられたような場所には現われぬし、また、それは、はじめは人に畏怖の念を起こさせるかもしれないが、結局は人の心を慰め、元気づけ、神の愛の灯をともしることなく去ることはないのである。<sup>15)</sup>

さて、以上のような基準は、Prosser が、彼自身のある予見の上に立って、それに都合のよいものだけをとり上げて来て、並べたものなのであって、それは、われわれの本能的な反応の仕方とは、相反するものであると、あるいは人はいかかもしれない。Hamlet における亡霊は、はたして、どのように現われ、主人公その他の登場人物は、それに対して、どのような態度をとっているであろうか。超自然物に決定的な劇的機能を果たさせ、ある意味では Hamlet と好対称をなしているながら、どこか一脈相通ずるように見える、Macbeth の場合を念頭におきながら、この作品における亡霊の出現の模様を見、その劇的な意味を考えてみたい。

## (2)

哨兵達が亡霊から受けた最初の印象は、それがいかにも疑惑につつまれ、人に不安と恐怖を与えるものであるということであった。彼等にとって、亡霊は、深い暗闇の世界から、この国の不吉な運命を前ぶれる為に現世に現われて来た、目には見えても手には触れられない、あるものなのであった。たとえそれが“王に似ている”ものではあっても、哨兵達はそれを、“this thing,” “dreadful sight,” “apparition,” “spirit”等と呼び、あるいはそれを指さして、“it,” “thou,”等と言い、決して国王に対すると同じような呼び方はしていない。亡霊を信じようとしなかった Horatio にとっても、それは、もはや単なる妄想ではなく、恐怖と驚異の念で彼の心を痛めるものである。無気味に物言わぬ相手に対して、Horatio が、神の名にかけて語れと促す時、それは不興の色を示し、怒るようにして去る。このように異様なものは、あの偉大なる Caesar が倒れた時現われた天変地異のように、この国の不吉な運命の序幕として出現したものなのかもしれない。それ故 Horatio は、たとえそれが、‘毒気を吹きつけようとも’それをさえぎろうとし、哨兵達はそれを矛でうつ、

けれども、それは何の効果もない。やがて朝の到来を示す鶏の声を聞くと、それは日の神の前には立つことの出来ない、罪の自覚あるもの——‘guilty thing’<sup>16)</sup>——のように立ち去るのである。Marcellus の語るところによると、救世主の生誕の日が近づく頃になると、夜も全く健全で、暁の鶏が夜もすがら鳴き、精霊も妖怪も外を出歩くようなことはないという。彼はここで、今現われた亡霊が、救世主に象徴される愛と慈悲とは、全く矛盾する掟を持つものであることを暗示している。そして、それこそがまさに、この亡霊の持つ基本的な性格であるかもしれないのである。

以上のような亡霊のことを、Hamlet に告げようとして三人は去るが、その頃の Hamlet の精神状態はどのようなものであったか。父の死の記憶もなまなましいうちに行なわれた母の再婚、一彼は表現しつくせない悲しみと憤りをいだし、深い孤独の中に沈んでいる。その感情は、晴れやかな宮廷の中で唯一人、かたくなに身につけている喪服でも、溢れ出る涙でも、とうてい表わし得ない何ものである。太陽神 Hyperion のような父に、あれ程までいとおしげに寄り添っていた母が、葬式が終って一カ月もたたぬ間に、その父の弟に、しかも“半身半獣の森の怪物”に急ぎ抱かれようと不倫の床に走るとは、今の今まで信じていた彼の理想的な人間像は、あまりにも、もろ壊れてしまったのである。

ところで、何故 Hamlet 一人だけがこのような憂うつに沈んでいるのであろうか。彼だけではなしに、少なくとも幾らかの他の宮廷人達も、たとえ自分の肉親の者のしたことではないにせよ、当然、葬式にひき続いて行なわれた王妃の結婚は、まことに奇妙であるという感情に、とらわれている筈であるのに、そうした人は一人も見当たらない。作者はそうした人を一人も登場させていないのである。あるとすれば Horatio 一人位であるが、彼も Hamlet 程特別に奇妙な感じを持ってはいないようである。これはどうしたわけなのであろうか。われわれは、Hamlet を公正な目で見るとは、彼以外の人々の心情をも察しておかなければならない。そこで、われわれは、ひとまず、Hamlet の目を通してではなしに、われわれ自身の目で、廷臣達、及び、結婚した当人達を見ておかなければならない。

先ずはじめに、廷臣達が、この結婚を特別妙なものとも思わずに、いられるのは何故であろうか。おそらく、それは、彼等の Claudius や Gertrude に対する見方が、Hamlet のそれとは異っているからに他ならない。彼等は、Gertrude が“武勇の国デンマークの王妃”として、風雲急を告げる国境の状況に対処しなければならないという特殊な立場にあること、つまり、先王の崩御による国の混乱の際に乗じて、国の周辺に出没する Fortinbras の軍隊に対処する為には、先王の死の直後の結婚も止むを得ないものであると認めていたに違いない。次に、結婚した一方の当人である Gertrude はどうか。彼女自身も、この国の危機的な状況に対処することが、一国の王妃として当然の務めであると判断したのかもしれない。彼女は、必ずしも、Hamlet の言うような悪い面だけを持った女ではない。息子の目には、彼女は無節操に情欲のおもむくままに動く、いやしむべき弱い女と映ったかもしれないが、彼女の振舞を見ていると、すべてがよかれかしと願う、やさしさと善意を備えた女であるように思える。彼女は、Cordelia のような、かたくなな程に正義感と愛情をもった女ではないにしても、決して Regan や Goneril や Lady Macbeth のような邪悪な女ではない。また、彼女の息子の罵るように、肉欲の奴隷にだけ落ちているという証拠もない。また、彼女が先王の存命中から Claudius の愛人であったという証拠もない。‘adulterate beast’ と亡霊は口走っているけれども、彼女の不義姦通の事実は、どこにも見当たらない。さいごに、Claudius はどうか。彼に対して悪意をいづく亡霊や Hamlet は、彼を口汚く罵倒している。確かにその後の彼の行動を見ても、彼はいかにも奸智を働かせ、陰謀を自在にたくらむ、典型的な Machiavellian である。しかしその半面、彼の持つ政治家としての力量は刮目に値する。彼は一国を背負って立つにふさわし

い王としての、威厳と知力と外交的手腕を持っている。その实际的、政治的思慮の深さと、事にのぞむに勇断を以ってする胆力は、Hamlet をはるかにしのぐ。自分の本心を容易に外に見せず、心中の煩悶を妻にさえ見せない超人的自制心と、ねばり強い意志と演技力は、Macbeth のとうてい及ぶところではない。危機に立つデンマークを治めるに、不相応な薄弱な意志はどこにも見られない。

以上のように見てくると、廷臣達がこの結婚を Hamlet と異った見方をしているのは、むしろ不思議ではないように思える。しかるに、Hamlet だけがひとり憂うつであるのは、彼個人だけの特別な感情があるからに他ならない。また、ことさらに、彼だけの特殊な感情が強調されているのは、実は、作者の劇作の意図の一つが、それを描くことにあったからに他ならない。

そこで、次に、彼の特殊な個人的感情のよってきたるところは何であるかを、彼の言葉から推測してみよう。第一にあげられることは、Hamlet にとって、母が近親相姦の罪を犯した女であり、その不潔な血が自分の体内に流れているという嫌悪感、ないしは、不快感が彼の心中にあるということである。亡夫の弟との結婚は、当時は今日におけるより、はるかに罪悪視されており、James I は、近親相姦を、魔術、男色、毒殺、貨幣偽造と同じくらい、おそるべき罪業とし、それを死刑に相当するものとしていた。また、英国では、今世紀まで、死んだ妻の姉妹と結婚するということは違法であった<sup>17)</sup>。Hamlet のいわゆる第一独白のはじめにある、‘flesh’の形容詞は、やはり‘Solid’(Folio)よりも‘Sullied’(Second Quarto)の方がよく、<sup>18)</sup> 彼はすでに、そこで、彼自身の肉体の穢れを意識しているものとするべきであろう。また、そうした方が、その後の彼の Ophelia に対する振舞方は、矛盾することなく理解されやすい。このような肉体的、道徳的不潔感が、彼の心のしこりになっている最大のものなのである。第二に考えられることは、Claudius によって、彼が王位を篡奪されたという被害意識であろう。それは後に Rosencrantz, Guildenstern との話し合いや、母の寝室での Claudius を罵倒する言葉の中にもみられるものであるが、第一幕、第二場での、“I am too much in the sun.”の一言の中にも、その他の憤懣と混り合って、抗議という形であらわれている。第三にあげられるのは、母の愛情を横取りした Claudius への恨み、及び、亡き父を忘れ、Hamlet の悲しみをよそに、再婚にのみ気をとられ、彼の心情への理解力の足りなかつた母への恨みであろう。それはまた更に、母を慕う潜在意識、Oedipus complex と結びついているといってもよいであろう。以上のような原因から生まれる、ねたみや、あるいは、自尊心を傷つけられ、侮辱を受けたという被害意識が心中深くこもり、特殊な憂うつ状態を生んだのである。

このような彼の願望ないしは欲求が挫折したという感情、あるいは、彼の母に対する信頼感が碎かれたことから生まれた失望感の描写は、実は、やがて次に爆発的に起こる激情、すなわち、復讐心の発生の母体として、作者が巧みに用意した伏線なのである。はなはだしい欲求不満を内に秘め、耐え難い孤独感と無力感にうち沈んでいる彼の特殊な心理状態は、やがてある媒体に触れて激情の奔流となり、狂気という形をとって外にあらわれる。そして、その媒体とはすなわち、亡霊のささやきなのであって、この場合、亡霊は Hamlet の復讐心の発生の秘密を抉剔するに格好の劇的相関物として、作者によって採用されたものと言ってよい。もしも、亡霊のささやきを、Hamlet の復讐を使嗾する言葉としてとるならば、Hamlet 一人だけの特殊な不満に特別焦点が当てられているということは、Hamlet がそのような誘惑をうけられるだけ充分に彼の心が発酵していることを、観客に示そうとした作者の意図のあらわれであると考えられないであろうか。

以上が Hamlet が亡霊を迎える前の状況であった。そして今、Hamlet は自らそれを迎えようとしている。その際、果たして亡霊は、どのようなものとして彼の前に現われ、どのような作用を彼にするのであろうか。それを見ることは、Hamlet のその後の行動の動機を探ることになるのみならず、作者のもつ劇作の意図をも探ることになろう。何故ならば、Macbeth においてみられると

おり、Shakespeare の場合、超自然物は作者の特別な意図のもとに登場させられたものなのであって、それは単に、妖婆や亡霊の存在を信じていた当時の観客に、いかにそれが戦慄に満ちた実在物であるかを示し、彼等の好奇心を満たす為だけに登場させられたものではないと思われるからである。Macbeth の場合、主人公が荒野で出会った妖婆は、彼の心の奥深く、ひそかに発酵していた無意識的欲望の顕現を誘発させた悪魔的な力なのであった。それは、理性の力では如何ともしがたい、人力以上の、闇に潜む神秘的な内密の力の暗示によって、いかに主人公の内部に眠る欲望が覚醒され、心理的に自然に発生して行くものであるかを見せる為、作者によって、巧みに設定された劇的相関物なのであった。Hamlet においてもまた、われわれは、それと同じようなことを見る事が出来るのではないか。

亡霊に対する Hamlet の最初の反応は、Horatio 達の場合と同じく、それが、まことに不可解なものであって、あるいは危険に満ちたものであるかもしれないとしたことであった。彼にとっても、それは一体、“天から来たものか、地獄から来たものか、その目的が善意に満ちたものなのか、それとも悪意をもったものなのか”<sup>19)</sup> いずれともつかない、奇怪な神秘的なものであった。亡霊が Hamlet 一人だけに語りかける時も、それは天から来たものでも地獄から来たものでもなく、煉獄から来たものであることを明かす。<sup>20)</sup> それは悪魔でもなく、健全な霊でもない。なぜなら、それは生前自ら犯した罪から浄められぬまま、放免されてきているからである。このように、亡霊の正体が、善とも悪とも言えぬ謎につつまれた、不可解な神秘的なものであるということは、いったん彼が亡霊と別れた後も、劇中劇で亡霊の言葉を確認するまで、彼を遅疑逡巡させ、道に迷わせる原因になったものであり、また同時に、それが Hamlet の世界全体に、暗い神秘性と不安と疑問の雰囲気をつたよわせる根源になっているものである。このように、善とも悪ともつかぬ亡霊に Hamlet がひかれていくさまは、あたかも Macbeth が荒野であった妖婆に予言を聞かされて、思わず恍惚となった時の様子とよく似ている。彼は呟く。

This supernatural soliciting

Cannot be ill, cannot be good.

(I, iii, 130-131)

そして、もしそれが善なるものならば、なぜ自分は、ある種の誘惑に心を奪われ、心臓が異常に高鳴り、心は麻のように乱れて、頭の働きは妄想に圧倒されて、目に見えるのはただ幻影ばかりなのか、そしてまた、もしそれが悪なるものならば、なぜそれが真実を告げて前途の成功を予約したのか、と自問するのである。このような、善とも悪とも判断のつかないものに近づくのが、主人公 Macbeth であり、また Hamlet でもあるのである。しかしながら、このような主人公とはちがって、彼等のまわりの人々は、Macbeth, Hamlet いずれの場合も、そのような奇怪なものに接近することは身の破滅を招くことになるとしている。Banquo は、暗闇の手先である悪魔というものは、人を誘惑し、危害を加えて失敗させる為に、真実を語って人を信じさせ、最も重大な事柄において、人を裏切るものであるという。

And oftentimes, to win us to our harm,

The instruments of darkness tell us truths,

Win us with honest trifles, to betray's

In deepest consequence,

(I, iii, 123-126)

ところが、そのような彼の言葉が Macbeth の耳には入らず、彼はただ呆然となり、うっとりとして妖婆の予言に陶醉しているだけなのである。

Look, how our partner's rapt.

(I, iii, 143)

Hamlet の場合においても、彼は、“たとえ地獄が口を開けても” 亡霊に語りかけよう、すなわち、それが、善霊であろうと悪霊であろうとかまわぬ、と言うのである。Horatio は、亡霊が Hamlet を恐ろしい絶壁の上へおびきよせ、彼の理性の力を奪いとり、気を狂わせてしまうことになるかもしれぬような、危険なものであると忠告して、哨兵達と共に彼をひき止めようとする。彼にとって、亡霊は人を誘惑して、身の破滅を招く悪魔であるかもしれず、人が近づくべきではないものなのである。しかし、Hamlet は、皆の手をふりはらって、“妄想にとらえられて気がちがったように” 亡霊のあとを追って行く。

亡霊から、“Revenge” とか、“Murder” という声を聞くや否や、Hamlet は、あたかも内心そう言われることを期待していたかのように、それを何の証拠もなしに、たちまちにして受け入れてしまう。父を殺した蛇は、今、その頭に王冠をいただいているのだと聞かされたとたん、彼は叫ぶ。

O my prophetic soul!

My uncle!

(I, v, 40-41)

つまり、彼はここで、まさに Macbeth の場合と同じように、自分自身の内部に潜んでいた無意識的欲望の確証を待っていたかのような、即座の反応を示しているのである。

亡霊の手招きは、はたして、Horatio が警告していたように、Hamlet の理性の力を奪いとり、彼を戦慄させ、気も狂わさんばかりの悪の深淵を凝視させる<sup>21)</sup> 為のものであった。暗闇の中で、亡霊が秘密に Hamlet に示したものは、決して彼の心をやさしくあたたかく慰める優美なものではなく、恐怖と怒りと嫌悪感を同時に起こさせるような、彼の伯父と母との近親相姦の淫猥な情景と、気味悪い父王の毒殺の様相である。そのような亡霊の示す悪それ自体は、Hamlet の心の深淵に隠れている欲求不満の代償として、絶望的に、醜悪で残忍なものを、自ら迎え入れようとする意識を呼びさまし、感応させ、それに共鳴を起こさせる。それは決して Hamlet に愛と安らぎを与えるものではなく、むしろ、吐き気をもよおすような嫌悪と、ふるえるほどの憎悪と怒りを与えて、復讐をそそのかす。亡霊が、

If thou didst ever thy father love —

(I, v, 23)

とか、

If thou hast nature in thee, bear it not.

(I, v, 81)

と言う時、それは Lady Macbeth が、“もし私を本当に愛してくれるなら、そして、一生自分で自分の臆病を悔やみたくないなら、実行しなさい”<sup>22)</sup> と、しりごみする夫を叱咤して、Duncan の弑逆を使喉する時と同じ強さを持つ。やがて Hamlet は、Horatio 等に探しあてられ、今夜見た亡霊のことは決して他言せぬように彼等に誓わせようとする時、亡霊の声 —— “Swear” —— は地下から聞えて来る。当時、人々に信じられていたところによると、この亡霊のように、もぐらのように地下に穴を掘るといふことは、一般に悪魔のすることなのであった。そして、舞台の下というものは、復讐の女神とか、地獄に落とされて永久に救われない亡者とか、悪魔達の親しいすみかとして使用されていたのである。<sup>23)</sup> Hamlet は、そのような地下からの亡霊の声に異常に興奮し、半ば狂気になって、何べんも場所を変え、剣をたてかえて誓いを確かめる為に動きまわる。ここに見られ

るものは、もはや完全に復讐の魔にとり憑かれ、血に飢えて激しく狂いまわっている王子の姿である。それは Iago に嫉妬心を植えつけられて、のたうちまわる武将 Othello の姿と、どこか似たものを感じさせる。

以上のように見てくると、*Hamlet* において亡霊の果たす役割は、*Macbeth* における妖婆のそれと同じものなのであり、それら、いずれの超自然物も、主人公の心の秘密を解明する為に不可欠な劇的相関物になっているのである。*Macbeth* の場合、それは主人公の心の奥深くうずまきところの、人力では如何ともしがたい野心や、殺意の発生という、超自然的、神秘的事実を示す為のものであるように、*Hamlet* の場合においても、それは、主人公の復讐心の発生過程を示す為の劇的手段の一つになっている。つまり、これらいずれの場合も、超自然物は、主人公のまさに超自然的で不可避的であるとしか言いようのない、心理的事実を劇的に示す手段として使われているのである。*Hamlet* における亡霊は、その冒頭において、永遠の世界と現世との対比という、この劇の主調音を打ち鳴らし、現世の汚濁と悪を提示し、しかも、それらと主人公の肉体に流れる血を関連させることによって、主人公の心の秩序を乱し、彼を“激情のとりこ”にして、復讐の狂気と行動へかりたらしめるものなのである。

このように見ると、亡霊は、まさに、John Vyvyan が Shakespeare の悲劇に共通する構造の原理の中で挙げている、“誘惑の声”の役割を演じているものと考えられる。Vyvyan の示す悲劇の構造というのは、次のようなものである。<sup>24)</sup> (1) 多くの点で高邁ではあるが、しかし、一つの致命的な欠陥を持っている魂が、ある特別の誘惑にさらされる。(2) やがて来るべき誘惑の“声”が描かれ、それが悪を説得する。(3) 誘惑の場があり、そこで主人公の魂の弱点がさぐられ、主人公は誘惑に屈する。(4) 普通、独白の形で主人公の内部の闘いが示される。主人公の生得の高邁性が誘惑に逆らうが、やがて失敗する。(5)、(6) 第二の誘惑との熾烈な内部の闘争がある。しかし、結局主人公は魂の王国を失う。(7) 悲劇的行為あるいは暗黒の行為がある。(8) 恐怖、戦慄の実現。(9) 死。*Hamlet* の場合、はたしてここで言われているような致命的な、悲劇的欠陥があるか否か、また、亡霊が彼を説得する復讐を悪と呼んでよいものであるか否かは今は措くとしても、少なくとも亡霊の声は、確かに、*Hamlet* の魂を一層錯乱、崩落させて行く最大の源になっているものであると言ってよい。

今、Shakespeare の悲劇の背景に、中世の *Morality Play* の伝統をおいて見るならば、その中の一つ *Wisdom* における、魂とは何かという問に対する主人公の次のような答、

a soul is both foul and fair :  
Foul as a beast, by experience of sin,  
Fair as an angel, of heaven the heir,  
By knowledge of God, by his reason within.<sup>25)</sup>

は、*Macbeth* の妖婆達の唱える文句、

Fair is foul, and foul is fair : (I, i, 11)

を思い出させるが、このような、美醜何れの芽をも含んだ人間の魂が、分裂崩壊して行く有様は、*Macbeth* においては勿論、*Hamlet* においても、作者によって特に意図的に示されていると思われる。これら二つの作品のいずれにおいても、Shakespeare は、美しいものと醜悪なるものの混乱の中に苦悶する人間、すなわち、神と悪魔との中間者として苦悶する人間の姿を示しているのだから、超自然物は、そのような混乱をひき起こし、主人公の心の平和を奪い、激情の嵐を呼んで、暗黒の意志、すなわち、原罪の発現を誘う源として登場させられているものであると考えられる。

もしもわれわれが、亡霊の登場にこめられている、以上のような作者の意図を汲みとろうとはせず、それは、単に原作で使われた“convention”を、作者がそのまま踏襲したものにすぎないものであるとしか見ないならば、亡霊と別れた後の主人公の行動の意味は十分に理解されず、したがって、この作品全体を通しての作者の真のねらいのありかもまた見失われてしまう。18世紀以降今日までの *Hamlet* 批評の大半は、亡霊の告知を受けたあとの主人公の行動と心理の謎を解明することのみ力点がおかれていたと言ってよく、また、今世紀に入ってからの、“Convention”による作品の理解を重視する、いわゆる、歴史派の批評家達の出発点もまたそこにあったのである。けれども、亡霊の持つ劇的意味を以上のように見定めた上でなければ、次に現われる主人公の変貌の本当の意味はとらえられないと思うのである。(つづく)

<注>

- 1) E. A. J. Honigmann, *The Date of 'Hamlet', Shakespeare's Survey* 9, p. 33 (Cambridge, 1956)
- 2) P. Quennell, *Shakespeare*, p. 263 (The World Publishing Company 1963)
- 3) J. D. Wilson, *The Essential Shakespeare*, p. 105 (Cambridge, 1952)  
 なお、*Hamlet* 執筆の個人的背景については、更にさまざまな憶測がなされている。たとえば、“Shakespeare の息子 Hamnet は11才で死んだが、それは作者が Hamlet の物語にひきつけられていた頃と、それ程遠い頃のことではなかった”とか、あるいは“作者が16才の時、Katherine Hamlett という娘が Ophelia と同じような状況のもとで溺死した事件があった”等。
- 4) 中野好夫、「エリザベス朝演劇構話」P. 145 (八潮社, 1964)
- 5) P. Quennell, *op. cit.*, pp. 263-264.
- 6) W. Babcock, *Hamlet, A Tragedy of Errors*, p. 18 (Purdue University Studies, 1961)  
 また、G. Barker によると、*Hamlet* 中の語句と呼応するものが、*A Treatise of Melancholie* の中に多く見られる。— *Prefaces to Shakespeare, Hamlet*, pp. 309-320 (Bastford, 1963)
- 7) *Hamlet*, IV, iv, 27.
- 8) C. M. Lewis, *The Genesis of Hamlet*, pp. 39-60 (Kennikat Press, 1967)  
 Shakespeare: I do not know / Why yet I live to say “This thing's to do,” / Sith I have cause, and will, and strength, and means, / To do't.  
 Belleforest: The elder Hamlet and Claudius, two brothers, were joint governors of a province in Denmark. Hamlet married the King's daughter, Gertrude, and so kindled his brother's jealousy. Claudius assembled a band of men and fell upon Hamlet as he sat at a banquet, and slew him. He publicly avowed the deed, but asserted that he had done it in defence of Gertrude, ...  
 German play: My worthy friend Horatio, through this assumed madness I hope to get the opportunity of revenging my father's death. You know, however, that my father is always surrounded by many guards; wherefore it may miscarry.  
 ibid: Hither have I come once more, but cannot attain to my revenge, because the fratricide is surrounded all the time by so many people.
- 9) H. Granville-Barker, *op. cit.*, pp. 42-52.
- 10) H. Fluchère, *Shakespeare and The Elizabethans*, p. 96 (Hill and Wang, 1961)
- 11) J. D. Wilson, *Six Tragedies of Shakespeare*, p. 65 (Eihosha, 1963)
- 12) E. Prosser, *Hamlet and Revenge*, pp. 105-106 (Oxford, 1967)
- 13) James I, *Daemonology*, p. 66. quot. in *ibid*, p. 104.
- 14) *The Holy Bible*, I John 4: 1.
- 15) E. Prosser, *op. cit.*, pp. 108-117.
- 16) *Hamlet*, I, i, 148.
- 17) J. W. Draper, *The Hamlet of Shakespeare's Audience*, pp. 114-115 (Oclagon Books, 1966)
- 18) J. D. Wilson, *What happens in HAMLET*, pp. 39-44 (Cambridge, 1964)
- 19) *Hamlet*, I, iv, 40-42.
- 20) *ibid*, I, v, 9-13.
- 21) L. C. Knights, *An Approach to 'HAMLET'*, p. 46 (Chatto & Windus, London, 1964)
- 22) *Macbeth*, I, vii, 35-44.
- 23) E. Prosser, *op. cit.*, p. 140.  
 H. Levin, *The Question of 'Hamlet'* p. 22 (Oxford, 1959)

- 24) J. Vyvyan, *The Shakespearean Ethics*, pp. 13-31 (Chatto & Windus, London, 1968)
- 25) T. Spencer, *Shakespeare and The Nature of Man*, p. 54 (Macmillan, 1966)